

本興寺だより

令和四年
十二月
第二百四十号

「法華經を信じる人は冬のごとし。冬は必ず春となる。いまだ昔より聞かず、見ず、冬の秋とかえられることを」

(宗祖 妙一尼御前御消息)

師走が駆け足で訪れました。今年を振り返れば、平凡な日々の積み重ねで、殊更感慨深いことはないという人もいれば、大きな喜びを得て幸せを感じた人も、また反対に悲しい体験に心が打ちひしがれた人もおられます。

それでも、時は何事もなかったかのように淡々と過ぎ去っていきます。時の流れは川の流れと同様に絶えず先へ先へと流れます。一時も留まることなく人の一生も、出会う困難が数多くあっても、そこに心を停滞させることなく、前向きに歩み続けることが大事なことでと云われます。

冒頭の文は、日蓮聖人が妙一尼という女性の信徒に送られた手紙の一節です。

妙一尼は夫と共に法華經の純粹な信仰を貫いてきましたが、日蓮聖人が佐渡に流罪中に夫を亡くしました。残された妙一尼は自分も身体が強くないうえに、病気の幼き子を抱えていました。

そういう厳しい状況の中でも、佐渡の聖人のもとへ身の回りの世話をする人を送り、また身延山に入られ



た後も、変わらぬ真心を日蓮聖人に尽くしました。
日蓮聖人は、妙一尼が心の不安や悲哀を乗り越えて、一人で必死に子ども達を育てながら、信心を貫いておられたことに對し、どんな時でもご神仏から護られている自分があることを忘れず、必ず幸せを取り戻して欲しいという、徹底した励ましのお手紙を送られた一節です。

聖人ご自身も、佐渡の流罪をはじめ、命に及ぶ大難を何度も体験されたからこそ、妙一尼は、聖人の力強い励ましの言葉に心を打たれたのです。

どんな厳しい状況でも、人はそれを乗り越えれば必ず希望が満ちる春が来るのです。

時代が変わっても季節の風景が変わらないように、人の生き方もその中に教訓があります。
冬木立（冬の落葉した木々）の山を称して「山眠る」といいます。「冬枯れ」といわれる荒涼とした山林の中で、秋に生じた冬芽が寒中の中で、静かに春にそなえる姿が見られます。

人生も冷たい雪も雨も風も必要なのです。人は自分の望むものを次から次へと手に入れて、嫌なことを次々と捨てていけばどんな幸せになっていくという思い込みがあります。しかし仏様はその考えでは、際限のない欲望に振り回され、世の矛盾に突き当たり、本当の幸せはつかめないと言われます。

この世で体験することは好む事と好まざる事は表裏一体なのです。嫌いなことの中に新たな幸せをつかめる蕾があるのです。

一年を振り返ってみた時、悔いが残ることが沢山あります。問題にぶつかった時、その都度真剣に向き合ってきたつもりでも。

人間は凡人だから、間違えがあつて当たり前とは分かっていても、心の何処かでそれを許さない完全を求める己がいるのです。自分を過度に攻めたり、他人に對して徹底的に批判するの心を疲弊させるのです。ありのままの自分を素直に受け入れ、反省し、他人を許し、心の重荷を捨てて軽くして前に進むことが大切だと云われます。

人の運命は、どの様にも変わりうるのです。「運命」は命に運ばれて来ると書きます。自身の心持、行い、ご加護によってそれに応じた未来が引き寄せられ、運ばれてくるのです。

一方、人は宿命という定まったものを持って生まれてきます。「宿命」は生まれた時すでに命に宿るべくして宿っているものです。男女の別、性格、能力、環境など。人はこの宿命を基盤として人生を歩みます。

「何でこんなところに生まれたの？」「自分が大嫌い」という人がいますが、宿命を全て前向きに受け入れて、ここから新しい自分の花を開花させていくのだと云われます。宿命を否定すれば幸せは遠ざかります。

幸福とは、童話の「青い鳥」を探す、チルチルとミチルの兄妹のように、幸せを外に求めて旅に出て得られるものではなく、今ある自分の側の小さな幸せに気づき、感謝し、その蕾を、どんなに厳寒中でも大切に保ち育てる中で、やがて大きな花となって春の開花

があるのです。

生きていることは素晴らしいことなのです。年を経ると何時しか老いと病が並走ってきます。体力も衰え、気力も薄れがちになります。健康な人と比較して、つい愚痴が出たりします。

朝目覚め、布団の中で考えごとをして、じつとしていると、心臓の鼓動を感じます。生きていること、生かされていることが実感されます。生きている数千年一度も休憩することなく、朝も夜も、どんな時でも規則正しくたんたんと鼓動しています。

「辛い時があっても、一生懸命に支えているから頑張って生きよう♥」と励ましてくれている気がします。「心配」とは自分の心の中に留まるものです。「心配り」とは相手に對して心配りをする気持ちです。



心配にとらわれている自分の心の殻を破り、周囲の人に心配りできるほどの心のゆとりを培う生き方が大切なのでしょう。

一年で一番日が短いのは冬至（十二月二十二日）です。この日からだんだん明るくなり光の春が始まります。一年で知らず知らずに積もっている心の闇（塵）を、年末の大掃除と同じく払拭して、新しい希望の光が、新しい年に差し込むように、気持ち新たに新年に向かいたいものです。

毎月の「本興寺だより」も二十年経ちました。今年も有り難うございました。

本興寺住職 中 谷 聰 秀 合掌